

保育学文献賞を受賞して(2)

# 「子育てひろば」そして

## 保育園をめざして

新澤 誠治

「下町の小さな保育園」の歩みをまとめて『私の園は子育てセンター』（小学館）と題して出版、幸い、それが一九九五年の日本保育学会の文献賞をいただくことができました。

一園長のただどしい実践記録で全く自信がなく、おずおずと世に出させていたただいただけに、評

価していただいたことをうれしく思うと共に、一つの節目を越えて、また新しい保育園の歩みをするのに大きな希望を与えられたことを感謝しています。

機会が与えられたので、この本ができるまでの経過やこの本にかけた思い、その後、考えていることを少し書かせていただきます。

## 保育園の曲り角に立って

一九九四年は、ことのほか忙しい年でした。児童福祉法が施行されて五十年、そのもとで実施されてきた措置制度が時代に合わなくなったと、抜本的に見直しを意図して保育制度検討委員会が設けられ、改正に向けての論議がされていきました。

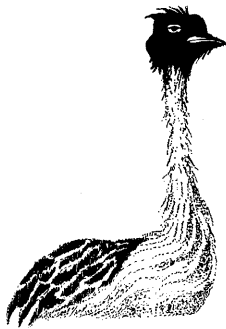
保育界ではそれに対して、公的な保障を崩すものとして、危機感がひろがり、「児童福祉法の精神を守れ」「措置制度を拡充していけ」と反対声明がでたり、集会があちこちで開かれ、反対の声が各地であがっていました。

当時、私は東京都私立保育連盟の会長、全国私立保育園連盟の副会長をしていた関係もあって、その論争の渦中にあり、毎日、保育園を留守にして、研究会、会合、集会にでてこうした論争の渦中にいました。

私はそこで二つのことを考えていました。

一つは、厚生省が措置制度の改正をいう前に、もつと児童福祉法や保育園の果してきた役割を高く評価することがあつていいのではないか。

そのために各保育園が、もつと戦後の荒廃の中で子どもたちの姿に胸を痛め、保育園をつくり、今日の姿にまで築き上げてきた歴史、そこでの子どもたちの成長、親たちの希望、地域の中で子育ての輪をつくってきた、こんな姿を記録し、それを重ねて保



育園が果してきた役割をもっと声を高くして伝えていく必要があるのではないかと思っていました。

二つには、単に制度の改正反対でなく、やはり「いま保育園は時代の曲り角に立っている」という自覚のもとに、保育の現場から家庭、地域の姿容、それに対応してきた実践を出しあい、これからの保育園の役割、機能を考え、その主張の上に保育制度を築いていくことが必要だと思っていました。

そう思いつつ、自分がその作業をするとは、全く考えていませんでした。

そんな折、小学館の編集長から、「貴方が今まで歩んできた道、そしてこれからの保育のあり方を本にまとめませんか」と書かれた一通の手紙をいただきました。

私にはとても自信がなく、始めはお断りしましたが、「あなたの四十年間の保育の歩み、そこで『共に育つ保育』『保育園は子育てセンター』という主

張に至ったことを書きなさい」と説得され、先の二つの考えもあつて、書く決心をしました。

### 難産だった記録

いざ自分が書くとなると、書きたい内容、思いだけは大きくふくらんできて、それをどう書いていいか、机に向かって迷うばかりでした。

私は「保育園の歩みは集団のドラマ」と考えていたので、創設期からの同労者のこと、保育園を共に築いてくれた父母たち、沢山のボランティア、苦勞をかけた家族の群像等を書きました。

かなりの枚数の原稿になって編集長に見せると、厳しい表情で「こんなに沢山の人の名前がでて、その活躍ぶりが書かれても、読者は混乱し、名前ばかり読まされても読者には興味はわきません」と言われ、「もう一度始めから書き直すように」と原稿は突き返されました。

次に「子育てセンター」としての現在の園の姿を書き、自分の保育園や保育園像を理論的に書きまし



▲子どもたちと遊ぶ筆者

た。やっと全体の三分の一位書いた原稿を手渡すと、編集長は「このような抽象的な書き方は面白くありません」「もっと保育園の歩みの事実と、あなたの思いを書きなさい」「それも何を言ったと言うような活動の羅列ではだめです。もっと失敗も含めて、素直な気持ちを書いてください」と、温和な顔は崩さず、でも断固とした調子で突き返されました。

私は意を決して、「私」という一人称で書くことにし、一九五五年（昭和三十年）、大学一年生の時のスラムの子どもたちとの出会い、その時の驚き、街全体に漂う雑然とした感じ、生活の匂いや音、子ども一人ひとりの表情、若い心の痛み、躍動を思い出し書き出していきました。

こうして書き出すと不思議なもので迷いの糸が解かれ、混沌とした経験や心の軌跡、若い時の夢、社会に対する怒り、保育にかける理想等、長年の思い

を吐き出すようにスラスラと書いていきました。

まだ学校を出たての青年がただ理想の旗を掲げての仕事は、直に壁にぶつかり、立ち往生し、人間関係や経済的な挫折、そこを乗り越えたと思うと、また大きな壁、そんな試行錯誤の連続でした。そのなかで、多くの人の助言、協力を得て、人の輪や事業をひろげてきた四十年、表面の出来事の奥に潜む、保育園の歩みの精神の脈が見えてきました。

それにしても、脱稿して間もなくの脱力感は強く、大量の吐血をして、入院、静養をしばらくする等、文字どおり私には、血を吐く思いの難産をして、生み出したものでした。

### 「子育てひろば」としての保育園

私は作品の最後に、各地の実践を交換しあい、次代の保育を共に考えていきたいと思います。うと訴えたのです。多くの保育園から共感や様々な意見が寄せら

れ、保育のネットワークがひろがったことを感謝しています。

現在、神愛保育園は「子育て支援センターのモデル保育園」となり、三年目に入っています。

定員七十三名、産休明け保育、延長保育、障害児を受け入れての統合保育を展開している上に、子育てセンターとして、毎日の育児相談をはじめ、地域のお母さんが子連れで自由に参加できる子育てサロンや母親講座、メンバーを固定してのたんぼぼ教室、子育て情報誌「たんぼぼ通信」、保育室を開放しての「一日保育」等をしています。

毎日、園舎から園児の声と共に、地域の子どもの声、母親の姿や声も弾んでいます。

ただ、こうしてプログラムを並べると、子育てセンターが保育に特別の活動を付け加えたもの、プログラムの展開ととらえられたり、いま厚生省の政策メニューに乗っての事業とだけしかとらえられない



▲「子育てサロン」に集うお母さんたち

ことが多くあります。

中には、「新澤さんは厚生省が『子育て支援センター』というのに迎合して、にわか始めたのでしょー」という批判を受けて、驚いたこともありません。

私が「保育園が地域のセンター」といったのはもう、十数年前のことであり、また「地域に根ざした保育園」「子どもを主人公とした環境を通しての保育」「共に育て、共に育ちあう保育」をめざして、保育内容を見直し、園運営を問い直し、そして母親の育児不安のひろがりに「保育園は地域の子育てパートナーに！」ならなければと決断し、こうしてたどりついた考えが「子育てセンター」であり、保育園の試行錯誤の歩みの到達点と思っています。

**保育園がもっと地域に親しめるものに**

私の本は一九九五年の三月に出版されましたが、

その少し前に「保育問題検討会報告書」が出され、措置制度の改正問題は両論併記の形として一段落、そして続けて国の基本政策として、「エンゼルプラン」が出されました。

そしてまた、「児童福祉法の抜本的な見直しを！」と児童福祉審議会がもたれ、これからの保育園、制度のあり方が論議され、保育園の今後が課題とされています。

私はこれからの保育園の課題として、親生まれ、信頼される保育園になることだと思っています。

「子どもが生まれたらまず保育園に知らせよう」

「保育園で子どもの誕生をみんなで祝い合おう」

「何かあったら保育園に相談にいきよう」「地域の問題を保育園で話し合い、みんなで解決していきよう」

というように、地域の中で身近な存在になっていきたいものです。

いま、保育園は門を開き、敷居を低くして、気軽



に足を踏みいれ、保育園の園長や主任、保母とことばを交わすことができる施設になることが求められていると思います。

そのために園庭開放から、時には保育室の参観や開放、行事への参加、園の講演会、サークル、運営にも母親が参加の機会をもつ、こうしたことの積み

重ねの中で、保育園が本当に国民のものになっていくのだと思います。

もう一つは、保育園がもっと自由に創造的なものになることを願ってやみません。

### 質のよい保育とは何だろう

講演会での質問や各地の保育者の反響の中で「地域の子育てのパートナーと言っているが、いま、入園している措置児の保育が大切ではないか」「保育園の活動をひろげること、それだけ保育の質は薄まっていくと思う」「保育の質を高めていくのが保育者の責任」と、こんな意見が多くあります。

私はその「質の高い保育とは何だろうか」と問い返します。今までは保育園、幼稚園は家庭、地域の中に教育機能が豊かにそなわっているという前提の上で、保育園、幼稚園内での保育が考えられ、保育者と子ども、子ども同志の關係に収斂され、展開さ

れてきたように思います。

私は「子育てセンター」ということばをきけて、「子育てひろば」という言い方をしていますが、今まで保育は保育園内で自己完結してきたように思うのです。

保育は保育者と親との共同の作業、保育園は地域の自然、文化とふれあう「ひろば」と考えるのです。

「子育てひろば」としての保育園は、私の保育宣言であり、これからの保育を考える、一つのキーワードと思っています。そうした意味でいま、保育園自身も曲り角にたち、これからの時代の保育を創造していきたいと思えます。

(神愛保育園)